

# 人は死を背負って生きている

柏木 哲夫

大阪大学名誉教授、淀川キリスト教病院名誉ホスピス長。1939年生まれ。1965年大阪大学医学部卒。同大学精神神経科に3年間勤務、その後ワシントン大学に留学。



1972年に帰国、淀川キリスト教病院に精神神経科を開設。

1984年にホスピスを開設。

「人は死を背負って生きている」

つまり生と死の関係というのは、ちょうど一枚の紙の表に生があり裏側に死が裏打ちされているようなもの。

しばしば人は生と死を別々に考えがちだが、本当は常にひとつで、ちょっと風が吹けば紙は裏返り死があるような関係。

死に直面してから突然あわてて死について考えるのではなく、普段から自分の死についてよく考えておくとよい。(毎日では多すぎるであろうから)せめて最低限、一年に一度、自分の誕生日には自分の死についてよく考えたり心の準備をしておくことを人々に勧めている

米国留学中にホスピスを学び、帰国後の昭和48年にホスピスの考えを医療に取り込んだ。現在まで2500人の命を看取ってきた。

「人の死は生の延長線上にある」のではなく「人は死を背負って生きている」  
人は生きてきたように死んでゆくものだ。

昔、家族は家で死んだ。中学二年生の時に祖母が家でなくなり、その時に死を感じた。今は病院で亡くなる方が多く子供達は死を体験していない。

現在は死を勉強しないまま死を迎える。これは大変なこと。年に一度位、自分の死を考えることが必要。誰にでもある誕生日に死を考えたらどうか？  
防災記念日があり年に一度訓練をしている。人の死は100%なのだから・・・もっと事前に勉強すべきだ。

「死はこの世の別れ」ですが「死後の世界のスタート」でもある。自分たちは末期患者を良い船でこの世からあの世へ送っている。

浪人時の反動で、大学の1、2年生の時によく遊んでいた。ある時、空しさを感じ、友人の誘いもあり教会に行った。その時、片言の日本語で話す牧師さんの熱心さに感動した。また、そこにいた人の顔に、今まで見たことのないような笑顔の人がいたのを鮮明に記憶している。

あるとき教会で次のような話を聞いた。  
「人間は自己中心」「これは罪(SIN)」ここから逃れることは出来ない。「この罪を背負って亡くなったイエスキリストを信ずることで、あなたは救われる・・・」という話をきき、これがきっかけで洗礼をうけた。教会に通うようになって5年後だ。

12月22日、洗礼でミズレの降る寒い川に入った。長いあいだ川に入っていると罪が流されると思いき身をおいた。川から出てきた時に、体全体がホホカツとして自分が生まれ変わったような気分になった。

1972年に米国で末期患者のリエゾン(橋渡し)の討議に参加した。医者・ナース・ソーシャルワーカー・宗教家・ボランティア・・・皆 あと一二週間の命の人々に対し、真剣に活動している姿をみて感動した。

帰国後、日本でホスピス施設をつくることを提言。予算の2億円は寄付と献金でまかないと提案したが、甘い・・・といわれた。「神が必要と思えば、天の窓が開く」の思いがあった。

二人の印象的な患者がいた。

一人は72歳の膵臓がんの患者。一代で倉庫会社をおこし社長になり、地位も名誉も財産もある。痛みが強く、死にたくない！死に対する恐怖感が強く、死を受け入れないまま、心・魂の痛みがとれないまま、「こわい！」と言ってなくなった。死ぬ時はその人の衣がぬけて、魂がむき出しになる。入院してきた時は立派なスーツに身をつつんでいた。病院でパジャマになると、ただの人で魂がむき出しになる。

2週間後、72歳の肺がんの女性が入ってきた。始めに自分から、あと1週間ぐらいの命だと思ふ・・・神の所にゆくので嬉しいが、この痛みだけはとってください！の注文だった。その患者は、入院後急速に衰弱し最後を迎えた。横にいる娘に、静かに「行ってくるね！」と言って息をひきとった。娘さんは「行ってらっしゃい！」

この姿をみて感じた。この二人には  
■再会の確信がある ■永遠の命の確信がある

二週間前の社長とは全然違う！

人間、最後のときは、魂の平安があるかどうか？が勝負。最後の決め手になる。

体の痛みは近代医学がコントロールできる。  
心の痛み(うつ)は薬・カウンセリングがある・・・  
魂の痛みはその人の生き方にかかわってくる。